

# 第37回 消防団員意見発表文集

令和5年2月5日（日）

東京消防庁消防学校

共催 一般社団法人 東京都消防協会  
東京消防庁

## 目次

支部	消防団	階級	氏名	テーマ	ページ
第一方面	麻布消防団	班長	加生 武秀	人を技で救うことができる、それは、愛です。	1
第二方面	大森消防団	団員	大島 剛	消防団に入って思うこと、 そして新しいご近所カンケイ、はじめました	3
第三方面	目黒消防団	班長	石井 勇介	消防団活動は、人を成長させるー私と消防団ー	5
第四方面	牛込消防団	団員	木村 充宏	消防団員としての自覚と覚悟	6
第五方面	滝野川消防団	部長	尾崎 泰子	命を守るお母さんへ	7
第十方面	石神井消防団	団員	井出 洸貴	消防団活動を通しての意見・提言	9
第六方面	上野消防団	団員	楠原 久力	消防団で出来ること	10
第七方面	本所消防団	部長	坂口 直美	あの時私は そして今	12
北多摩	狛江市消防団	団員	三浦 美彩	消防団の存在	13
西多摩	福生市消防団	副分団 長	本橋 龍一	社会人としての学びの場	15
南多摩	八王子市消防団	団員	永田 慎太郎	音楽で市民と消防団との架け橋へ！	17
島しょ	式根島消防団	団員	田村 修一	消防活動から学んだ大事なこと	19

# 人を技で救うことができる、それは、愛です。

第一方面支部代表

麻布消防団 班長 加生 武秀

本日は、私に意見発表の場をくださり、ありがとうございます。私は、平成28年、2016年に消防団に入団しました。35歳のときです。その私には、消防団に入る前からもうひとつ、別の姿があります。自衛隊です。

大きな災害や火災などで、消防署員と消防団員が協力して活動するように、やはり、大きな災害や危機などで、常備の自衛官と協力して活動する予備自衛官を、私は消防団に入る前から続けています。

私が、なぜ、自衛隊に入り、消防団に入り、ずっと両立しているか。それは、共通点がある、と考えているからです。消防団も、自衛隊も、人々の命を守り、救うために活動している、という共通点です。

私は若い頃、大きな地震災害を2度経験しました。消火栓も防火水槽も壊れて海水を使つての消火、壊れた建物や土砂に埋まった人々の救出。その現場に、防火服あるいは迷彩服を身にまとい、ほかの誰もができない「技」をもって活動する方々の姿がありました。

技があれば、人間は、より多くの命を救うことができる、そして人々を悲しみから救うことができる、これは愛だ、と私はそのとき感じました。自衛隊の採用面接のときに、これとまったく同じ言葉をそのまま伝えて、私は今、予備自衛官になり、さらにその中でもより多くの技をもって活動する、即応予備自衛官にも選抜されました。私のような、常備自衛官を経験したことのない一般公募の予備自衛官から即応予備自衛官に選抜されたのは日本でまだ数百人。その一人として活動しています。

自衛隊と消防団との共通点が、技による愛だと述べましたが、その技はそれぞれ違います。活動範囲も違います。だからこそ両方の技をもって地域に貢献したい、という思い、それが私が消防団を続けている理由です。昨年秋、麻布消防団員の一人として、東京都の消防操法大会に参加しました。大会に向けて重ねた訓練で得た技は大きなものでした。この技をはじめとして、より多くの技を高め、私だからこそできる自衛隊の技との相乗効果で、人々を救う愛を、磨いていきたいと思えます。

この、技に、地域の人々あるいは国民から、期待し信頼していただけているからこそ、われわれは活動できています。消防団に入団してから、日ごろの点検を機に、どこに消火栓や防火水槽があるのか、日々、活動服を着ていないときも、意識して見るようになりました。また、防災訓練などに呼ばれるうちに、それまでは通りすがりの方々であった地域の多くの方々と、顔見知りのつながりができました。これはとても大切なことだと考えます。大きな災害のときの安否確認はもちろんのこと、火災の出場時に「ここはご家族が3人で、平日の昼はお子さんが仕事に出られている家だけど、みなさん無事かな」「この方には、こちらのルートに誘導すれば目的地までご通行いただけるかな」と、地域に根ざした、消防署員とは違った視点での任務にあたることもできるのも、消防団

員の重要な役割だと考えます。居住地団員であっても勤務地団員であっても、地域を深く知るための活動は、ぜひ消防団でしていただきたい、と私は考えます。

東京2020大会を機に、東京消防庁と各消防団とが連携して、消防団活動で外国語も活用できるための人材育成が強化され、その講習に私も参加し、大会中の会場警戒にも消防団員として参加して外国の報道関係者等の誘導も行いました。今、入国規制が緩和され街に外国の方々が多くおられます。言葉のみならず、日本の文化や街について分からないことだらけの方々も救える消防団でいられるよう、そのニーズに継続的に応じられる体制をぜひ整えていただきたいと私は考えます。麻布消防団が活動する地域には、多くの国の大使館があるなど、世界中の人々が多く生活されています。大使館で行われる防火防災訓練に呼ばれるときもあります。私は英語で話すときもあります。彼らがもし日本語を少し知っているならば、やさしい日本語で話すときもあります。その経験から私は言えます。ことばはツールです。技のひとつです。すべては安全に、より多くの人々が救われるために。

Thank you for listening to me. 聞いてくださり、ありがとうございました。

# 消防団に入って思うこと、 そして新しいご近所カンケイ、はじめました

第二方面支部代表

大森消防団 団員 大島 剛

「30年のサラリーマン生活を辞めた。でも今のワタシに何が出来るのか？」そんなことを考えながら令和三年の正月明けに新聞を開くと、あまり見かけない「消防団員募集」の折込チラシが目についた。

ふと思い出したのは、多忙にしていた三十代の頃、消防署で訓練をする消防士を見かけ、「落ち着いて訓練が出来るのは世の中が平和な時だ。」と思う。

一方で「万が一に備えて、体力・技術・知識を鍛える消防士とは、なんとステキな職業だろう。」と転職を考えたが、募集要項の年齢制限を見て、あきらめたことを思い出した。では今、「消防団員募集」のチラシを前に考えてみる。

「消防士のような活動は出来るのか？」

「火災・防災のために、どんなボランティア活動があるのか？」

いつの間にか、多忙な時は考えもしなかった「地域貢献」について考えるようになっていた。そして十年以上住んでいるこの馬込地区で、何の役にも立っていない私は、「コレをやらずして何が出来る？やるしかない」と即断即決し、入団を申し込んだ。

いざ入団してみると、操法大会のような華やかな訓練もあるが、普段は積載車や可搬ポンプの動作確認、街頭での予防警戒や降雪時のマンホール雪かきなど、消防士と同様に万が一に備えた準備を、常に怠らない活動をしていることを、初めて知った。また消防団活動の一環で上級救命講習を受け、救命方法を訓練することで、誰でも何処かで人命救助につながる行動が出来る可能性があることも知った。知っているだけで、とっさの判断や冷静な対応が出来ると思う。これは老若男女問わず多くの人に知れ渡り、受講する人がもっと増えて欲しい、と思うようになった。

しかし、その消防団活動を支える団員は高齢化に合わせ減少傾向にあります。今後も消防団が長く存続するためには、常に新しい仲間が必要であり、そして若い団員獲得が必須条件と大いに思う。だからこそ若い世代獲得に向けて、気づいたことがある。

街で見かける消防署員・消防団員は、まさに子供達のヒーロー・ヒロインとして、とても関心を持たれています。小学校の写生会や地域のお祭りイベントのまさにその現場で、ヒーロー・ヒロインである消防団員が、こどもや親世代に、直接その経験や役割を熱く語り伝えながら、消防団員募集を大いにアピールすることが団員獲得につながりやすいのでは？と思っています。

最後に、ボランティア精神の消防団そして消防団員は、非常勤の特別職の公務員の立場にあり、災害現場など規律厳しい活動の際は、上意下達は必須条件・順守すべきことです。ただ、若い世代や女性団員の一部から、先輩団員からの昔ながらの強めな指示やモノ言いによる悩みを聞くことがあります。上下関係に厳しい会社生活を過ごした私でさえ、訓練時に感じる事もありました。せっかく入団して辞めてしまわないように、それを苦手に思う若い世代や女性、外

国籍の団員に対して、上層部や幹部、先輩団員の方には、多様性の求められる時代に合わせた＜柔軟な対応＞が、求められていると考えます。

そして現在の私は、そんな団員たちと私的な会食を行い、内輪話まで語り合える仲間・カンケイになりました。サラリーマン時代の自分には出来ていなかった「新しいご近所カンケイ」を、楽しめるようになっていました。消防団で知り会えた『新しいご近所カンケイ』とは、消防団の活動中も離れた時も、同じ地域に住み、年齢や団員経験の上下を超えた助け合えるワンチームです。そんな消防団は、街角での挨拶や気軽な会話・会合を通して、『地域に明るさを与える団体・人達であって欲しい。なっていきたい。あり続けたい。』と、2年の消防団員を経験した今、私は深く思っています。

# 消防団活動は、人を成長させる -私と消防団-

第三方面支部代表

目黒消防団 班長 石井 勇介

私の消防団活動の原点は、二十歳のときに参加した東日本大震災のボランティア活動です。最初は興味本位でしたが、活動していくうちに数日の予定を3週間に延ばすほど、懸命になっていました。互いに協力し合いながら、瓦礫の撤去や行方不明者の捜索を行う中で、自らの手で社会のために役立つ行動をしたいと、強く思うようになりました。

被災地から戻った後、もっと身近で貢献できることはないかと考えていたとき、地元の消防署に「消防団募集」のポスターがありました。「これだ、やってみよう。」駆け込むように消防団に入団しました。

それから9年。消防団の活動は、決して楽なものではないと痛感しています。休みの日にも、訓練やイベントに参加します。災害では、危険な場所で活動することもあり、力仕事も多いです。これらは、ただの大変なことや辛いことだけで終わることでしょうか。私は、そうではないと思います。

救命講習の指導者として活動をはじめた頃、担当した中学生の生徒が言うことを聞いてくれないことに、頭を抱えていました。「なぜ、聞いてくれないんだ!」。私はこれまで、人前に立ったり、人に何かを教えたりすることがとても苦手でした。「いったい、どうすればよいのか…」講習の度に、必死で考えるようになりました。

ある日、胸骨圧迫と人工呼吸の講習で、再び同じような生徒たちに出会いました。よく見ると、誰も人工呼吸ができていません。そこで訓練を中断して、目の前でお手本をみせました。胸がしっかり動いた訓練用人形を見て、生徒たちは驚きました。正しい人工呼吸をするとどうなるのか、わからなかったようです。お手本を目の前で見て、一人が懸命に取り組むようになり、他の生徒も続いてくれました。生徒たちの姿勢は変わり、その後の訓練は各段に上達して終えることができました。振り返ると、「自分も人に教える苦手意識を克服できるぞ!」と考えるようになりました。

やがて、普段の行動にも変化が現れました。上野駅で、倒れている人を発見しました。「周囲の安全、意識、呼吸の確認。」やるべき事は明確でした。周りの人にも躊躇なく、協力を呼びかけました。救急車とAEDの手配、ガーゼやタオルの用意、手当のアドバイスと多くの協力をいただき、救急隊員に引き継ぎました。自ら率先して、見ず知らずの方とも協力して、危機を乗り越える力を身につけました。

このように消防団が行う訓練や活動は、団員として必要な技術を学べるだけではなく、一人の人間として大きく成長できる場ではないでしょうか。

得られた経験や知識は、日常生活でも発揮できます。消防団活動に対する理解が広まるれば、災害に強い街づくりに繋がることは勿論、大切な人たちを守れるはずです。

消防団は、人の役に立つことを通じて、私自身、そして皆さんが成長できる場所である。

このことを消防団の活動を通じて、世の中に訴えていくべきだと思います。

# 消防団員としての自覚と覚悟

## 第四方面支部代表

牛込消防団 団員 木村 充宏

「一番員だけ遅い」「下を向くな」「指はつける」  
今日も指導の集中砲火を浴びる。

自分以外の選手は、全員優勝経験もある先輩団員。

私は、今から4年前に入団しました。入団時が、ちょうど操法大会に向けた訓練の開始時期にあったことから、訓練の手伝いに専念することで、消防団に溶け込もうとする自分がいました。

入団2年目、ポンプ操法1番員選手に指名され、初心者のための訓練が始まりました。見るとやるとでは大違い。いざ自分がやってみると、思った以上に難しく、動きもいまひとつ。

「ホースのたぐりは引くといいよ」「前傾姿勢は足もつと前に出すと見栄えもいいよ」「筒先は腰骨の上に置くと楽だよ」

訓練を重ねるうちに、注意から助言に変わってきました。言っても聞かない自分に、あきらめられたかな、と正直ひねくれて受けとめる時もありました。

「流れが分かってきたから大丈夫」「慌てるな、本番は早くできるから」「たくさんみんなと訓練したから大丈夫」

大会が近づくにつれ、励まし中心になってきました。もう逃げられません。大会当日まで、不安と焦りはつきまといました。

結果は何と優勝。個人優秀賞もいただきました。まさに指導の賜物。先輩指導員への感謝の気持ちが沸き上がり、本当にうれしかったです。

私は、これまで数々のチームスポーツをやってきましたが、今回のように一挙手一頭足にわたり、注意されたり、激励されたり、更に、細かな要領を親身に教示された経験はありませんでした。一方、訓練とその反省の繰り返しで、不甲斐ない自分を知り、本気で自分自身と向き合う貴重な機会にもなりました。

「関心をもつ、やってみる、謙虚に訓練と反省を繰り返す」  
このことは、物事を理解・吸収するのに何よりも大事なこと、と実感しました。

私は、社会人になって半分以上が海外勤務でした。阪神淡路や東日本大震災でも海外駐在中で、日本の状況がよく掴めず、必死に日本と連絡を取るだけの自分でした。このことより、災害への関心は、急激に高まりました。

「やってみる」の操法大会出場に向け、訓練と反省の繰り返しがあったからこそ、頭と体の両方で、消防団活動の真髄に触れながら、「いざ」に備える心構え・身構えを、ありがたく叩き込まれました。

今年は、関東大震災から100年の節目の年に当たります。SDGsの普及により、社会や自然・環境に対する持続可能性への価値観が高まっています。

地域防災の要として、地域住民の防災に対する意識の一層の向上と持続に努めて参ります。更に、消防署との連携を密にしつつ、地域に寄り添った防災・防火の訓練に、これまで以上に邁進します。



# 命を守るお母さんへ

第五方面支部代表

滝野川消防団 部長 尾崎 泰子

自分の大切な幼子が万が一の時の病気や事故に見舞われた時、一番身近でその命を守る事のできる存在は誰ですか？そうです、その子のお母さんなのです。

だから、より多くのお母さんに応急手当講習を受けてもらい、もしもの時に確実な応急手当ができる方々を増やし、命を救う輪を繋ぎ、広げる事が、応急手当普及員の資格を持つ女性消防団員である私の願いです。

消防団に入団する少し前でしたが、たまたまテレビで応急手当処置の番組を視た後の事、現在は高校生の息子が1歳のころ、食事中に突然、目を大きく見開き、びっくりしたような表情になり、瞬間「喉が詰まった！」と思いテレビで見た要領で肺の空気を押し出すように、思い切り背中を手で「バシーン！！」と叩きました。

すると息子は「ゲホッ」と食べ物を吐き出しました。

「気道を確保することができたー！ あー良かったー！」と息子の無事に心から安堵した事を今でも鮮明に思い出します。

先日もYouTube ニュースで1か月ほど前に応急手当講習を受けたばかりのステーキ屋の店長さんが店内でステーキを喉に詰まらせたお客様の異変に気付き、その場で行った応急手当により、お客様は事なきを得たとの報道に、迅速な応急手当により一命を救ったその店長さんに思わず拍手を送りたい気持ちになりました。

実際にこのような場面に皆様が遭遇することは一生に一度あるか無いかであり、救命講習を受講される方々や応急手当普及員の資格を持つ私自身も誰かを救わなければならない場面で、果たして十分な行動がとれるのか不安に思う事は少なからずあると思います。

しかし、我が子が突然の病気や事故で、緊急を要する時はどうでしょう？誰よりも「我が子を何としても助けたい！」と強く思うに違いありません。ただ、その強い思いと同時に、命を守る確実な行動ができなければ我が子は救えません。

現在私は、応急手当普及員の資格を持つ女性消防団員として時折、中学校や高校に行き、中高生の救命講習のお手伝いをさせて頂いております。学校授業の一環としての取り組みは本当に素晴らしいことだと思います。それにも増して、常に病気や事故などの危険性をはらんでいる、乳幼児を育てているお母さんこそ、応急手当を身に付ける必要性を強く感じます。

それには、そのお母さん方が応急手当講習を受けやすい環境が最も重要であり、それは、やはり、出産後3ヵ月位から児童館に行き始める、その時こそ絶好の機会です。

親子で集いますので、実際の我が子で体位など確認でき、シミュレーションができます。

実際に講習を受けた事で、お母さん方も日々の生活の中で、イメージし易くなり、イザという時には命を守る行動に移せる事と思います。その事が、少なからず乳幼児を育てるお母さん方の不安を取り除く、というメンタル面にも寄与

できるのではないかと思います。

だからこそ、私は強く思うのです。是非とも乳幼児を育てるお母さん方が応急手当講習を受けるチャンスを作り、一人でも多くの方に受講して頂き、万が一の時には一番身近な存在であるお母さん方に命を救う応急手当を実践して欲しいと。そして私のように応急手当普及員の資格を持つ女性消防団となって頂き、命を救う輪を繋ぎ、そして拓げ続けて欲しいと。

# 消防団活動を通しての意見・提言

第十方面支部代表

石神井消防団 団員 井出 洸貴

私は、「どのようにして若い世代の消防団員数を増加させるか」をテーマに発表を進めていきます。

このテーマにした理由は2点あります。1点目は、近年の消防団員の現状として団員数の減少・高齢化が問題となっているからです。令和2年度消防白書によると、団員数は年々減少傾向にあり、平均年齢も前年に比べ0.3歳上昇し41.9歳となっています。毎年少しずつではありますが平均年齢が上昇しており、年代別の割合を見ると30歳未満の割合は12.4%と極端に低い数値となっています。実際に、私がこれまで参加した訓練や操法大会をはじめとした消防団活動の参加団員を見ても、高齢の方が多いたのが現状です。2点目は、私たちの住む東京では、30年以内に70%の確率で起こると想定されている首都直下型地震が待ち受けているからです。今年度、首都直下型地震における被害想定が見直され、耐震化や不燃化などハード面における対策が身を結び被害想定は減少しました。しかし、首都東京を襲う大地震は我々に多くの被害をもたらすと想定されています。そのため、今後学生消防団員の増加というソフト面における対策に重点を当てていくことで、被害をより少なくできるのではないかと考えました。学生の入団促進について着目することで、団員数の増加と高齢化の抑制に繋がると考え、2点提言したいと思います。

1点目は、大学ごとに学生消防団組織を設けることです。これは、実際に名古屋市消防局で行われている取り組みです。名古屋市にある中京大学・名城大学をはじめとした8つの大学が集まり、大学ごとに分団を設け消防団活動を行っています。自分自身の経験ではありますが、消防団に入団した直後は同世代の団員はおらず、先輩ばかりで不安も多かったのを覚えています。このような不安を抱え、興味があるが行動に移せない学生も多くいるのではないかと思います。また、上京してきた学生にとって、学生期間のみ住む土地に愛着を持つことは考えにくく、地域貢献という形で消防団に入団するのは難しいのではないかと思います。そのため、大学ごとに消防団組織を持つ事は有効だと言えます。

2点目は、「特別区学生消防団認証制度」をより周知させることです。この制度は、東京消防庁が交付する地域貢献活動の実績の証です。就活時にさまざまなメリットがあると言われていますが、多くの学生がこの制度を知らないのが現状です。私の大学にも、「特別区学生消防団認証制度」のパンフレットはありますが、パンフレットがあるだけで目に留まっていません。そのため、入学時に行われる新入生オリエンテーションで「特別区学生消防団認証制度」のパンフレットを配布するなど、消防団員の広報活動を行うことが周知に繋がると考えます。これにより消防団の制度や活動の認知がされることで、学生時代に参加する課外活動の選択肢の1つになるのではないかと思います。

以上2点が、私が消防団での活動を通して感じた意見・提言です。今後、若者が地域を引っ張っていくという環境にしていく為にも、学生を中心とした若者が消防団に入団することで問題解決のきっかけになると考えました。

# 消防団で出来ること

## 第六方面支部代表

上野消防団 団員 楠原 久力

私は入団してから1年半以上活動がなく、消防団は災害時のみ活動する組織だと認識していました。

令和4年1月頃から消防団活動が増え始め、自分の分団の管轄区域を知り、消防団員の中には中学校時代の友人の父親や町会の知り合いなどがおり、地域に根差しているものだと感じました。

大学に入学して少し経った時、町会活動などでお世話になっている副分団長から可搬ポンプ操法大会の選手に誘われました。訳も分からないまま承諾し、事前に送られた動画では、全く分からず不安に思いながら訓練に行きました。

多くの先輩団員に囲まれながら整列の練習から始まり、4番員の行動を指導していただきました。審査会が近づくにつれて形になっていく嬉しさもある反面、ミスが目立つ焦りもあり、不安な日々を過ごしていました。

ただ、訓練終了後の先輩団員に誘われて行く食事がとても楽しく、一回りも二回りも年齢の違う人達と同じテーブルで楽しく話をしていて特別な感じがしました。

審査会当日、倒れそうなほど暑い中、影一つない上野公園の噴水広場で私達の順番が来ました。2番目ということもあり、それほどプレッシャーを感じていないつもりでした。

しかし、指揮者の「操法はじめ」の声で緊張が頂点となり、頭の中が真っ白になりながら吸水ホースの連結部蓋を外した際、勢いで蓋がチェーンから外れて地面に転がりましたが、自分の動作が分からなくならないように無視して続けました。私は4番員だったため、放水ポンプ前で立っている時間がとても長く感じました。

審査結果は入賞とはなりませんでしたが、とてもやりがいを感じ、また今年も審査会に出場したいという強い意欲を持ちました。

審査会が終わり余韻が抜けた頃、東京都消防操法審査会に出場する分団の訓練支援依頼を受けました。交通整理を行いながら近くで訓練を見学しましたが、通しの訓練を実施する前に整列の間隔や足の角度、歩幅など、とても細かく訓練を実施していました。2時間半ほどの訓練時間の中で、ほとんど休むことなく選手の一人一人が常に訓練に集中していました。私は強い熱意を感じ、訓練支援にもやる気が出ました。私は自分なりに出来ることを探して、準備や片付けなど円滑な訓練が出来るように励みました。

東京都消防操法審査会の当日も交通整理の係員として会場に行きました。現地で練馬消防署の小隊長とお話しをさせていただく機会がありましたが、活動技術や消防職員としての心構えを聞きプロ意識を感じました。

上野消防団の操法開始時に応援に行きましたが、事前訓練で見た時よりも統一感があり迫力を感じました。結果3位となり、選手と応援団員のほとんどが達成感で安堵した様子でした。

その後、消防署のイベントである防災救急フェアに参加した時、会場にいた親子から「一緒に写真を撮っていただけませんか。」と声を掛けられました。周

りには消防職員の方が多くいましたが、活動服を着ている以上、自分も消防に携わる人間と見られるのは当然であり、消防団員にも防災指導等の地域住民に働きかける影響力があると感じました。

最後に消防団員は、災害時の消防隊の補助が任務であると認識していましたが、地域住民に対する防災力向上の役割もあることを消防団活動を通して感じることが出来ました。私は、今回の可搬ポンプ操法大会出場参加により消防団に入団してとても良かったと感じています。

# あの時私は そして今

第七方面支部代表

本所消防団 部長 坂口 直美

2011年3月11日、激しい揺れが起こった。その震源地は400キロも離れた所だった。

人の予想を、想定を、遥かに超えた大震災が起こった。人は自然がもたらす災害の前ではいかに無力であるかを痛感させられました。しかし、映像を通して、報道を通して、人がその大震災から抗い助け合い生き抜いた事実を知り、今では私も知る事が出来た「自助、共助、公助の三つの力」がとても大切だと感じました。

東日本大震災の後、私は消防団の扉を叩いていました。私は家族を守る為、いや守りたい為、地震や災害に備える為に、自助となり、共助となり、そして人に、町に寄り添える公助になろうと消防団になりました。災害をただ恐れ、大自然の前で無力の一人の母親のままより、消防団の母親になろうと決意しました。

震災などの災害が起こった時、災害弱者はお年寄りや小さな子供達です。災害時にどのようにして連絡を取るか、そして孤立した災害避難者をどのように救い出すか、様々な恐怖が私の脳裏をよぎりました。大震災が私たちの住む東京で起こった時、署隊は恐らく手が回らないだろうと、「その時はどうするの？」その時には消防団がメインとなることも想定しなくてはならない状況があるかもしれないと。

私は今、消防団に入団してから10年以上の月日が流れました。正しく恐れ、そして出来ることから備えるということ学びました。

核家族化し高齢化社会が進むそのことは仕方ないことではあります。けれども、私は一人ではありません。消防団の仲間と共に防災訓練や警戒広報や、幼稚園、小学校、中学校などでの指導などを通して地道に町の人と寄り添った消防団活動をしていくことが大切だと思います。防災リーダーになろうとして、もがき頑張るのではなく、町の人にリーダーになってもらえるように一緒に訓練し災害に備えることが共助、自助につながり、命の絆になるのではないでしょうか。自分達の活動ではなく、地域の為の活動だという思いを抱いて。

私は、操法訓練や様々な訓練に積極的に参加し、消防団員としてもスキル向上になればと訓練しています。多くの活動、現場を見ることで知る。経験なしには正しく判断することが出来ないという思いを抱いて。そして、男性団員には見えない角度からの団活動、女性消防団員だからこその細やかな活動もあると思います。

仲間と共にこれからも臆することなく、立ち止まらずに、万が一のその時のために行動できるように努力します。家族のために、町のために、そして自分のために。

最後に東日本大震災で亡くなられた全ての方にご冥福をお祈りし私の発表を終わりにさせていただきます。この度は、このような貴重な機会をいただき誠にありがとうございました。

# 消防団の存在

北多摩支部代表

狛江市消防団 団員 三浦 美彩

「消防ってなに？消防やってるってどういうこと？」と私と休日の過ごし方などプライベートのお話をする機会があると必ず1回は聞かれます。

どんな大人でも、子どもでも、消防車は火を消す車、救急車は病気やけがの人を運ぶ車ということは知っています。消防署員の方々の仕事は消火、救急、もちろんこれだけではありませんが、消防士、救急救命士、レスキュー隊、消防職員それぞれの職務の内容をなんとなく知っている人は多いことでしょう。

では、なぜ本職を別に持っている私のような一般市民が消防団活動に参加していると「消防団やっているってなに？」「消防団ってなに？」となるのでしょうか。

幼いころから、何事に対しても慎重で、慣れるまでは時間がかかり、自ら行動することは苦手で、これまでずっと音楽を続けてきた私が長く消防活動に参加しているからということもあると思います。しかし、地域の消防団員としての任務や役割に対する認知度が低いことも大きく関係していると感じています。私は小学校3年生の時、当時近所に住んでいた友だちと習い事感覚で消防少年団に入団したことをきっかけに消防の世界に足を踏み入れました。消防車が好きだったということも、消防署に興味があったということもなく、学校でもらった募集のチラシを見てなんとなく楽しそうだからというとても単純な理由で入団を決めました。入団当初は、楽しそうという理由で入ったので消防の知識も消防に興味も当然持っておらず、同じ学校や他校の友だちとおしゃべりすることやちょっとした活動を楽しみにして行っていたくらいでした。年数を重ね、下級生、後輩が出来たことで“教える”ことも少しずつ増えていきます。いつのまにか消防が大好きになっていった私は、1つの班や隊を任されたことなどをきっかけにもっともっといろんな技術の習得をしたい、様々なことを学びたいという思いに変わっていきました。“教える”ということが簡単そうで難しく、“右へならえ”ひとつを教えることも困ったことを覚えています。

言葉で伝えることはいくらでもできます。でも、身につけていかなければいつになっても習得できない。だから練習するごとに毎回伝えることになる。消防団員として、そして消防少年団指導者として活動している今は、小学生のころから積み重ねてきた知識があるため、いまでは少しでもわかりやすく伝えるにはどうしたらよいのか、と考えることができるようになりましたが、私自身もまだまだ学んでいかなければならないと思うこともたくさんあります。消防団員として身に付けなければいけない知識や技術はたくさんあるのにも関わらず、大人になってそれぞれ仕事をしながら様々なことを習得するとなると大変なはずですが、ただ、このような消防団員それぞれの努力がある上で地域を守っているということはほとんどの地域の方々には知らないと思います。火災現場に出たって、消防署員さんたちが頑張って消火活動に取り組んでいると捉える方が多いだろうし、台風などの自然災害のときも、消防署の人たちが頑張ってくれていると捉える方が多いと思います。

だからこそ消防団員は本職を持ちながら普段からこういう活動をしていると

ということが地域の方々がもっと理解しやすい機会を作っていく必要があると感じています。消防というだけで遠い存在に感じる方も、大人になってから消防に興味を持つ方も少ないと考えるからです。そして、消防＝男性という雰囲気はなくしていきたいです。たしかに男性団員と女性団員では活動する上で出来ることに制限があったりします。でも、救命講習会などで地域の方と関わる機会があっても、「若い女の子なのにえらいわ」と言われることがなくなるくらい、誰もが当たり前消防団を知っている地域を作っていけるようにこれからも活動を続けていこうと思います。



# 社会人としての学びの場

西多摩支部代表

福生市消防団 副分団長 本橋 龍一

私が今回皆様にお伝えしたいことは、消防団活動とは、社会人として必要な事を、日々の訓練から学ぶ事が出来る場であるということです。私の実体験を踏まえてこれから説明します。

私が消防団に入団したのは、18歳の大学に入学すると同時でした。きっかけは、友人の父親が消防団OBで、友人が「一人で入団するのが嫌」ということで、私も誘われました。

当初は、軽い気持ちで、友人の付き合いで名前を貸せば良いかと考えていました。

元々高校生の時から、飲食店でアルバイトもしていましたので、この時から「大学の授業」「アルバイト」「消防団活動」と3つの事柄と、向き合う生活が始まりました。

入団してすぐに、ポンプ操法審査会の訓練が始まり、アルバイトの時間と訓練の時間が重なる為、1年目は、選手にはなりませんでした。当時の副分団長の方より「アルバイト優先で良いので終わった後に片付けだけでも手伝ってね」と話があり、言われる通りアルバイト後やアルバイトの休みの日に、雑用を行うようになりました。すると、周りの人が「ありがとう本当に助かるよ」と必ず自分を褒めてくれました。

翌年はアルバイト先に、早めからシフトを減らして貰うように交渉をして、選手になることになりました。訓練が始まると、今までの雑用とは違い、求められる責任が重くなります。「同じチームの選手」「コーチ」「使役」と様々な年齢の方から叱られたり褒められたりして、何とか乗り切ることができました。結果は優勝できませんでしたが、

以上の経験を踏まえて私は、気づかないうちに「時間の調整」「年上の方とのコミュニケーション能力」を学びました。

時は立ち、私も大学を無事卒業し社会人となり、消防団にも後輩ができ、役職も班長となりました。班長とは、後輩団員を責任を持って指導していく立場です。

ある訓練の日に、後輩団員が出席予定であったのですが、連絡なく訓練を休みました。私は先輩の部長へ「後輩の〇〇は、出席予定でしたが、連絡なく訓練を休んだので、私のせいではありません」と説明しました。すると「出席予定であったのが連絡なく欠席になったのであれば、それはお前の責任でもある」と言われました。また先輩の部長は、分団長と副分団長に、「後輩の〇〇が連絡なく欠席になったのは自分の責任です」と説明していました。この経験により私は、「部下の失敗は上司の責任」という、大切な事を学びました。

また時は立ち、私の役職は部長となりました。

部長になると、ポンプ操法訓練の指揮者となり、訓練日程調整・出欠確認・訓練内容等、様々なマネージメントを、自ら行わなければなりません。

一年目の大会の訓練時は、何をやっても、後輩からも先輩からも、不満を言われるようになってしまいました。何がいけないのかが解らずに、一人で悩ん

でいました。

大会には出場しましたが、後悔が残る年となってしまいました。

二年目は、一年目のような失敗をしないように、事前に色々な後輩や先輩から情報収集を行い、その意見を元に、操法大会へ向かいました。すると、一年目のような不満も出ずに、大会の結果も分団史上初とも言える、完全勝利を勝ち取ることができました。

この経験により私は、「事前準備の大切さ」「失敗を恐れず改善する志」を学ぶことができました。

現在は、副分団長となり、組織の運営に関して日々学んでいます。

今まで述べた通り、年齢や立場に合わせた、社会人として大切な事を消防団活動において学べた事が、普段の本業の仕事を行う上で、かけがえのない財産となりました。

現在消防団員は、深刻な人員不足となっています。この体験を、後輩や新人候補者へ伝えていく事が、今後の人員確保に繋がる、私の役目であり、良き伝統を引き継いでいく事ではないかと、考えています。以上、私の発表を終わります。

# 音楽で市民と消防団との架け橋へ！

南多摩支部代表

八王子市消防団 団員 永田 慎太郎

「音楽でつなぐ防災の輪」、この言葉を聞いたことはありますか。この言葉は、私が所属する「八王子市消防団音楽隊」の合言葉です。

ここで、八王子市消防団音楽隊について少しご紹介したいと思います。八王子市消防団音楽隊は昭和 59 年、全国で初となる消防団の音楽隊として発隊しました。現在でも、都内唯一の消防団の音楽隊です。主な任務は、団員の士気高揚、消防団の式典・行事をはじめ、防火・防災を目的とした広報演奏です。さらには、東京都や地元町会などの地域団体からの要請で演奏することもあり、来年で発隊 40 周年を迎えます。

このように、歴史ある消防団音楽隊に、私が入団した経緯についてお話します。

私は、学生のと時からトランペットという楽器を吹いていますが、社会人になっても好きな楽器を続けたいという思いがあり、市民楽団を探していました。そんな時に、消防団音楽隊の存在を知りました。消防団という組織は知っていましたが、自分にとってはあまり馴染みのない組織で、自分には無理なんだろうなと思っていました。しかし、募集ポスターには八王子市に在住・在勤・在学で楽器経験がある 18 歳以上、ブランクも可と書かれていました。何よりもポスターの「音楽でつなぐ防災の輪」というフレーズが目飛び込んできて、自分の好きなことで地域に貢献できるということに魅力を感じ、練習の見学を経て入団しました。

私の音楽隊での担当は、トランペット演奏の外、ポスターやチラシなどの広報ツールの制作や、新入隊員への「気を付け」、「右へならへ」と言った基礎的な規律の教育訓練を行っています。また、最近では、演奏会の司会も担当させてもらっており、司会原稿は演奏会毎に考え作成しています。もちろん、市民の皆様の前で演奏する際には、音楽隊の任務の一つである「防火・防災の啓蒙」を意識し、「秋の火災予防運動が始まりました。火の元には注意しましょう!」、「住宅用火災警報器は設置から 10 年で交換時期を迎えます」などの文言を入れるようにしています。お客様からの反応はとてもよく、演奏会が終わった後に、「寒くなるから火の元には注意しないとね」「警報器はつけているけど、交換や点検が必要なのは知らなかったよ!」と直接お声を頂くこともあり、音楽隊の活動を通じて消防団員として市民の安心・安全なまちづくりに貢献しているという実感と、やりがいを感じています。

その一方で気がかりなことは、現在、全国的に消防団員の減少が問題となっていることです。これは、消防団という組織が身近な存在から遠ざかっている点も、原因の一つであると思っています。友人と会話したときに「消防団に入ったんだ」というと、「消防署に勤めているんだね、すごいね!」といった具合に、話が噛み合わないことがしばしばあります。

このような経験から、私は今後、音楽隊の最大の武器である音楽を通じて、若者向けの選曲や演出を工夫したりして、消防団が身近な存在に戻るよう問題解決にも挑戦していきたいと思っています。

音楽は老若男女を問わず、誰もが親しみをもって楽しめるものです。また、人の心に直接響きやすいものでもあると思っています。

私は、平時においては災害現場での活動はしませんが、だからこそ、常に時代の変化を意識し、音楽隊の最大の武器である音楽を通じて市民の皆様の防火・防災意識の向上を図り、音楽隊の活動を団員募集につなげ、地域防災の推進に貢献できたらと考えています。

「音楽でつなぐ防災の輪」を合言葉に、音楽で市民と消防団との架け橋へとなっていきたいと思います。

# 消防団活動から学んだ大事なこと

島しょ支部代表

式根島消防団 団員 田村 修一

皆さまは、東京に式根島と言う島があるのをご存じでしょうか？東京から南に約 160 ㎞離れた場所にある小さな島で、人口わずか 500 人しかない島には、信号機はたった 1 個しかなく、船でしか行くことが出来ない島が式根島です。正式名所は、東京都新島村式根島、2 島 1 村の大変珍しい島で、新島と式根島は約 5 キロ離れています。

式根島の形は、まるで北海道の様な形をしていて、島内には、たくさんの温泉があります。

そんな式根島は別名「温泉天国」と呼ばれるぐらい温泉が豊富で、昔から湯治場として栄えました。さらに、海の色はエメラルドグリーンで、夏場はたくさんの家族連れが訪れ、小さなお子様も安心して泳ぐことが出来る遠浅のビーチが沢山あります。また、年間を通して釣りもできるため、多くの釣り人が訪れる島です。

そんな式根島には、驚くことに水が無いんです。厳密に言えば、岩盤が固く水はけが大変良すぎてしまい、雨水が全くたまらない島なのです。現在は、隣の新島から海底送水で水が送られてきているので、生活には全く困らないのですが、式根島にとって水は大変貴重な資源なんです。そんな式根島の消防活動についてお話させていただきます。

私は、式根島消防団に入団して約 12 年、その間に消火活動に 2 回、救助活動に 1 回出動しました。初めての消火活動は、冬の寒い夜。島内放送が鳴り響き、大浦方面で火事が発生との一報。私はあわててパジャマ着から団服に着替え、玄関を開けました。すでに焦げ臭い匂いがして、遠く離れたわが家まで臭かったのを今でも覚えてます。

消火活動中は練習通りに行うことが出来たのですが、西風が徐々に強まり、なかなか思うように消火出来ない状況が続く中、地域住民の方々がご自宅の消火器を持参され、気が付くとあっという間に多くの消火器が集まりました。その後、放水と消火器で何とか消火することが出来たのですが、その時に実感したことがあるんです。それは、「家庭用の消火器を定期的に点検してください！」です。なぜなら、期限切れの消火器がとんでも多く、まったく出ないモノから、出てもすぐに終わってしまうモノまであり、いざという時のために、日ごろの点検をしっかりと行い、地域全体で防災活動に取り組むことがとても大事だと感じました。

もう一つの消火活動は、式根島を代表する観光スポットでの火災でした。観光客の手持ち花火が原因で、人気観光スポットが無残な状況になってしまいました。そこでの教訓は、手持ち花火でも、十分に火災が起きるということです。また、バケツに水を入れて用意することや、ホースなどを用意するのは当たり前だということです。

今回は、水場が近くにありましたが、バケツやホースもなく、両手を合わせて水を入れて消火していたそうです。そんな状況ですと、大人が何人いても消すことはできず、あっという間に燃え広がりました。たまたま島民の方が通りか

かったおかげで、火事に気付き消防団に通報が入り何とか消火することが出来ました。通報が遅れももっとも燃え広がったらと思うと火事は本当に怖いと思いました。

最後は、救助活動についてです。海水浴場で救助要請があり、若い男性 1 名が海水浴中に行方不明、すでに数十分が経過と言うタイミングで救助に参加しました。その後、男性が発見され、心肺停止で診療所に救急搬送、AED を使用しながら、心臓マッサージを 40 分ぐらい行った時に学んだことがあります。

それは、「本番と練習では大きな違いこそは無いが、練習をしっかりとしていないと出来なかったことが沢山あったこと」です。

手の合わせ方や、力加減、タイミング、そして連携です。その時は、3 名で交代交代心臓マッサージを行い、ただひたすら心臓マッサージに集中したのですが、とても体力を使った思い出があります。私は、正直 1 回に 5 分ぐらい行うのが限界でした。やはり、いざという時に活かせるように、日ごろの訓練がいかに重要かを思い知りました。

最後に、消防団の活動は、地元地域にとって大切な組織であり、幅広い活動を通して、地元住民と連携を取りながら、地域を守るということを念頭に今後も活動を続けていきたいと思えます。

ご清聴ありがとうございました。